新米神社 祭時記

武蔵御嶽神社 公式SNS
facebook
instagram

お初にお目にかかります。私、令和元年度より当社の本務員に選定いただきはや一年。ならびに、東京二十三区内から御岳山に移り住まわせていただいてから一年と少々でもあります。

今号の『祭時記』は、僭越ながらそんな新米神職よりお届けいたします。

【令和元年　七月・八月】

本務新任奉告祭。緊張のなか迎える日々の神明奉仕。ある日は山を歩き、ある日は滝に打たれ。またある日は参道や集落内の木を伐り草を刈り。腰から鋸や鉈を提げ、手には大鎌や草刈り機を持つ人々…あれ？この人、ついさっきまで装束を着ていたような…？

ご先祖様には大変失礼ながら、盆の迎え火も送り火も慌ただしく焚く。

【九月・十月】

雅楽講習会と祭式講習会。いづれも一流の先生方にお越しいただき、直接ご指導、ご教授いただける事に感嘆。

欲にかられ、古文書を読み、気学にも触れていくなか、二度にわたる大型台風の猛威。数箇所に崩落が起こる。山上の復旧や整備には、まず自分たちが動かねばならぬことを知る。魔を射る流鏑馬祭に穏やかな日々を祈る。

風呂場の備品を無垢材に替えてみたところ、みるみるうちに多種多様なカビが発生。恐るべし、「霧の御嶽」。

【十一月・十二月】

秋季大祭。中だるむ間もなく、紅葉の盛りに多くの方をお迎えする。落葉や雪が積もったなら、いつ何時、誰ともなく境内や参道を掃き清める。そんな山の民たちへ尊敬の念を増すとともに、私もそうありたいと思う。また街よりおよそ四～五度は低いという寒さにあてられはじめたのも丁度この頃。

立地上、七五三のお詣りの方は少ないので、じっくり御祈祷におつとめいたします。防寒対策をなさって是非。

【令和二年　一月・二月】

新年一番祈祷から元旦祭。多くのご参拝の方に驚き額に汗。念願であった太占祭へご奉仕。講の皆様とのふれあいや、ご参拝の方とのお話などから、当社の歴史や独自性を再認識し、自らが伝え継承していく立場にあることの重みと責任を感じ気を引き締める。

この頃になると、朝一番、外が雪化粧をしていようと、視野一面の銀世界が拡がっていようと、もう驚かない。

【三月・四月】

春季大祭。突如として訪れた新型コロナウイルス感染症の恐怖。恒例の講社代参や、剣道大会等の催事が次々に中止。神職の本道たる祭典も規模縮小を余儀なくされる事態に。花も咲き緑も萌え、天気も良いというのに。閑散とした山に一抹の不安をおぼえる。

快復を祈り、収束を乞い願う一節を加えるようになった、毎朝の日供祭。

目まぐるしく、あっという間の一年。しかし、山の民はよく笑う。先輩方は、神明奉仕に勤しみながら宿坊を営み、料理を振る舞い客をもてなし、楽を奏し神楽を舞い、草木を整え畑を耕し、救難救助に出動し、雨にも風にも雷にも雪にも獣や虫にも負けず、山上生活の不便さは微塵も感じさせず、よく動き、よく笑いながら暮らしている。

この今まで街では出会ったことのない、生活力に満ち、年のわりに若く、活き活きしている人、というのがそこらじゅうにいる。恐ろしい。山の良い水と空気がそうさせるのだろうか。

とはいえ、私も少しづつでも、そんな「山の民」に近づけるよう努めます。まずは笑顔、笑顔。（記　服部朋也）

【五月・六月】

山をあげての例大祭・日の出祭も史上初の縮小。宝物殿と授与所を閉鎖、緊急事態宣言が解除されたのち、対策を施し再開する。人の移動が少ないためか、山も活き活きし、動物との遭遇率も上がる。境内から見やる東京の街は冬の空かと思うほどに澄んでいた。

山の茅を刈り、伝統に則って茅の輪を編んだ。この「夏越の大祓」を機に、少しでも良き方へ向かいますように。

御嶽神社あれこれ

『幕末のコレラ流行と御嶽山御師』

靱矢嘉史

新型コロナウイルスは世界的に流行し、日本でも感染が収まりません。武蔵御嶽神社では一日も早く終息するように祈願を続けています。ところで、江戸時代末期から明治時代前期にはコレラの世界流行が何回もおこり、日本にも及びました。

安政五年（一八五八）旧暦五月、感染した船員が乗るアメリカ船が中国の上海から長崎港に入港し、日本にコレラが上陸しました。日本では二回目となるコレラ流行、安政のコレラ大流行の始まりです。コレラは長崎から中国・関西地方に広がり、六月には東海道沿いの町で流行し、七月に江戸に侵入しました。八月には江戸近郊まで急速に感染が拡大し、さらに東北地方にも広がり、九月に終息しました。コレラは突然発病し、激しい腹痛・嘔吐・下痢に苦しめられ、場合によると数日で死に至ります。人々はコレラを「コロリ」と呼び、即死病として恐れました。人口百万の都市だった江戸では約三万人が亡くなったとされています。症状を目の当たりにした人々の中には、コレラは、異国から到来した「悪狐」の仕業、すなわち人体内部に侵入できる「くだ狐」によって発症すると考える者も現れました。御嶽山と同じく大口真神を御眷属とする三峯山（埼玉県秩父市。三峯神社）には、安政五年八月に数千人の代参者が登山し、一万を超える大口真神の御札が下付されました。「悪狐」を退治できるのは、狐の天敵のニホンオオカミしかいない」と信じ、多くの村や町がおいぬ様を拝借したのです。

御嶽山でも「諸国一統病気流行」を受け、二名の若い御師が、安政五年九月、川越町（現・埼玉県川越市）で、神輿に幣串・鏡などを立て、神輿を守護する像（「前立」）として、所持する「木像・黒白之神狛等」を置いて幕を張り、高張提灯・旗などを立てて「開帳同様」の形とし、神札を配札しました。結果「数多参詣相招、札料・賽銭等」が奉納されました。二名の御師は、川越町にとどまらず、「在々村々」、さらに中山道の桶川宿（現・埼玉県桶川市）から新町宿（現・群馬県高崎市）まで巡行しました。御嶽山のおいぬ様（「黒白之神狛」）もコレラ流行に際して信仰を集めたことが窺われます。

とはいえ、御嶽山に伝わる古文書で、コレラに直接関係する史料はあまり多くありません。コレラが大流行した安政五年にも、御師たちが例年通り講中を廻り、おいぬ様などの神札を配っていた記録が相当数残されています。コレラ流行のなかでも、御嶽山御師の多くは、着実に村々・町々を歩いて配札し、講中に対して家内安全などの祈禱を執行したと思われます。江戸時代を通して講中と御師の間で培われた日常的な堅い紐帯によって、御嶽山はコレラ流行に対峙したのではないでしょうか。

新型コロナウイルス流行で不安が続く毎日ですが、感染対策を十分行って堅実に日常生活を送り、従前通り変わらずに御嶽大神の御神徳を信じ、流行終息を願うことが大切なのかもしれません。

【参考文献】最終ページに記載

御岳山の流鏑馬祭

九月二十九日
夕刻五時　祭典
五時半　行事

流鏑馬というと馳せる馬上から三つの的めがけ鏑矢を射る武将姿を想像しますが、御岳の流鏑馬には馬が登場しません。江戸時代初期から記録に残る神事で、旧暦九月二十九日夕暮れを待って行われ、二月八日に日の出とともに行われる「日の出祭」と陰陽対の祭儀として受け継がれています。

旧暦二十九日は新月の前日か前々日、月明かりのない闇の中、かがり火をたよりに今日同様に行われていました。神社での祭儀を終え鳥居前広場に着いた斎主の指示で、かがり火に照らされた広場の東西に騎手、南北に的所役が移動し、騎手の「ようございますか」の発声で静かに儀式が始まります。騎手両者は時計回りに一周し、戻ったところで弓をはじく所作を行います。弓をはじく鳴弦（めいげん）の音は、悪霊退散を意味するといわれ、蟇目（ひきめ）神事でも使われます。結核・チフス・ペスト・コレラなどが流行ると、古くはこうした神事が各地で行われました。

三周目に弓を射ると集まった人々は矢に射られた的を意味する木片（こっぱ）を持ち帰ります。矢で射貫かれ、魔を滅するとされる木片に、焼き魚をのせて食べると、無病息災が約束されるといわれています。木片は、ご神木の檜や杉を薄く裁断したものです。

つかの間の儀式ですが、かがり火に照らされた神職の白い装束が夕闇に映え、参列者には深く印象に残る事でしょう。